

法華經為字和訓考(五)

——是・名—— (承前)

田 島 毓 堂

- 三 9 是訓為字
- 三 9 (1) 是訓為字の數
- 三 9 (2) 是訓為字の和訓
- 三 9 (3) 是訓為字例
- 三 9 (3) a A類 (為為章・補注とも是訓)
- 三 9 (3) b B類 (為為章不掲載・補注是訓)
- 三 9 (3) c C類 (為為章是訓・補注他訓)
- 三 9 (3) d D類 (為為章他訓・補注是訓)
- 三 9 (3) e E類 (為為章・補注とも他訓、他書に是訓あり)
- 三 9 (4) まとめ
- 三 10 名訓為字
- 三 10 (1) 名訓為字の數
- 三 10 (2) 名訓為字の和訓
- 三 10 (3) 名訓為字例
- 三 10 (3) a A類 (為為章・補注とも名訓)
- 三 10 (3) b B類 (為為章不掲載・補注名訓)
- 三 10 (3) c C類 (為為章名訓・補注他訓)

- 三 10 (3) d D類 (為為章他訓・補注名訓)
- 三 10 (3) e E類 (為為章・補注とも他訓、他書に名訓あるもの)
- 三 10 (4) まとめ

本稿は法華經の平声為字の中、是訓をもつもの、名訓をもつものについて考察する。

三 9 是訓為字

平声為字中、作訓為字について用例の多いものである。従つて、作訓為字同様、他の特殊訓と対置されるものである。但し、現在、為字をコレとよむことはない。それで、為字に対して、コレといふ和訓は、すでに一種の違和感を与えるものであり、その意味では特殊訓にいれることもできさうである。又、このコレは、代名詞としてのコレではなく、繋辭的働きをもつもので、恐らく中国語の「是」の和訓に由来するものであらう。漢文訓読調の文によく用ゐられる「コレハコレ、ナリ」の如き、二つ目のコレに当る。中に、これを代名詞と誤解したやうな例もある。是をコレと訓んだことから起る日本語内部での

問題がある。漢字訓と和訓との関係としての問題でなく、漢字訓によつて発生した和訓内部での問題である。また、日本語内部の問題として、是字のあらはす「:ハ〜デアル」の意を、「コレ〜ナリ」「〜タリ」「:ヨ〜トス」などといろいろにあらはすが、「コレ〜ナリ」「〜タリ」は問題ないとして(これも、コレ〜ナリが一種の再読であることは注意を要するが)、「:ヨ〜トス」は、状態よりも、変化の相に重きをおく表現と受けとれる。ここに、作訓による「:ヨ〜トス」「:ヨ〜トナス」と日本語としては区別がなくなつてしまふ。このことは、作・是両訓の親近性とも関係がありさうなこと、単に日本語内部の問題だけでなくなる。是訓為字は表はす意味の濃淡もあり、適否の判断も難しいものがある。以下、項目を分けて考察する。

三 9 (1) 是訓為字の数

為為章、補注の漢字訓を中心にみてゆく。ただし、前回の作訓為字の場合と若干基準をかへて表を作成した。

- A::: 為為章・補注両者に是訓のあるもの
- B::: 為為章不掲載・補注是訓
- C::: 為為章是訓・補注他訓
- D::: 為為章他訓・補注是訓
- E::: 為為章・補注とも他訓、他書に是訓のあるものとして分けて表示した。

A 表一 是訓為字一覽

No.	7	19	29	61	62	64	90	91	92	96	106	118	121	123	146	148	149	163	172
為	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
補	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
立	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
龍	○	○	○	○	○	⊕	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	⊕	○
文	○	○	○	○	○	○	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	作	○
尋	○	○	○	○	○	○	*	*	*	*	○	○	○	○	○	○	○	作	○
日	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	作	○
科	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	作	○
備																		龍::: 為に	
考																			

法華經為字和訓考(田島毓堂)

344	343	342	339	294	278	277	274	271	232	226	225	223	222	218	217	214	213	177	176	No.
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	為
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	補
○	○	○	○	/	○	*	*	○	*	*	○	*	*	○	○	*	○	○	○	立
*	*	○	○	*	*	*	*	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	龍
○	○	○	○	○	*	○	○	○	○	*	○	*	○	○	○	○	○	○	○	文
○	○	○	○	/	○	○	○	/	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	/	尋
		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	日
○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	科
																				備
																				考

421	420	419	413	392	386	362	360	359	358	357	355	353	352	351	350	349	348	347	345	No.
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	為
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	*	○	○	○	○	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	立
○	*	*	○	○	当	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	龍
○	○	○	○	○	○	○	/	○	/	○	/	○	/	○	○	○	○	○	○	文
○	○	○	○	○	○	○	/	○	/	○	/	○	/	○	/	○	/	○	○	尋
○	○	作	○	○	以	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	日
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	科
																				備
																				考

593	592	591	590	589	588	581	487	482	481	477	476	474	472	469	468	442	436	427	424	No.
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	為
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○名	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	補
*	*	*	*	○	○	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	○	*	○	立
*	*	*	*	*	○	*	○	○	○	○	*	○	○	○	○	*	*	*	○	龍
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	*	○	文
/	(○)	/	(○)	/	○	*	○	/	○	/	/		*	○					○	尋
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	作○	作○	○	作○	日
(○)	(○)	(○)	(○)	(○)	○	○								○		作	作	○	○	科
																				備
																				考

C B

151	115	66	65	49	475	600	598	596	595	546	541	540	539	538	537	536	535	534	No.	
作○	○	定○	定○	○	/	○	○	○	○	○作	○	○	○	○	○	○	○	○	○	為
与	定	定	定	定	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	補
/	/	/	/	定	/	/	/	/	/	(○作)	*	*	*	*	*	*	*	*	*	立
	○	定	定	○	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	龍
	定	定	定	定	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	文
	定	定	定	定	/	/	/	○	○	/	/	(○)	(○)	(○)	(○)	(○)		(○)	(○)	尋
	○	定	定	定	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	日
		文		定		(○)	(○)	○	○		(○)	(○)	(○)	(○)	(○)	(○)	(○)	(○)	(○)	科
		サ		定																備
		タ		定																考
		メ		定																
		テ		定																

E							D												
219	173	87	67	24	15	10	518	497	247	209	95	86	46	610	607	470	273	269	No.
与	作	名	作	当	作	定	作	定	作	当	作	名	与	○	当	○	作	作	為
与	当	名	作	当	作	定	○	○	○	○	○	○	○	作	定	名	成	成	補
/	/	/	/	当	当	定	/	当	⊕	○	/	/	○	/	/	/	作	成	立
与	当	名	作	当	作	定	○	定	/	/	○	名	○	作	当	名	成	龍	文
/	当	名	作	当	/	定	○	○	/	○	○	○	○	/	/	名	/	/	尋
是	当	名	作	当	当	定	○	定	○	○	○	○	○	作	作	名	作	○	日
与	○	○	○	当	○	定	○	定	○	○	○	○	○	作	名	名	○	○	科
				句解「是」		句解「是」			立…タリ										備考

A類、92例(他と同例としてまとめられてゐるものも一つ一つ別にかぞへた)、うち為為章の1例(No.546)は重複訓中には訓をもつ(他訓は作)。補注は2例(No.149、No.481)が重複訓(他訓はそれぞれ作・名)。立本寺本65ヶ所本文があるうち、是訓31例、他の34ヶ所は漢字訓はないが、和訓はコレである。龍本は76ヶ所本文があるうち、是訓28ヶ所、コレ45ヶ所、2ヶ所は漢字訓なく、和訓タメニであり(No.64163)、他1ヶ所所当訓である。文段経は69ヶ所是訓、10ヶ所コレ、1ヶ所別訓(No.163、作)、他12ヶ所は、同一訓のつづく所で、訓の省略されたところである。尋

／…該当本文なし
 空欄…本文あり、漢字訓なし
 ○…是、是也
 ()…同類と一括されてゐるもの
 □…寿慶上人注(立本)
 *…和訓コレ(漢字訓なし)

No.	523	519	341	275	267	255	No.
為	作	与	当	作	作	得	為
補	作	与	当	成	成	得	補
立	作	与	当	成	成	得	立
龍	作	与	当	成	成	得	龍
文	/		当	成	成	得	文
尋	作		当	成	成	得	尋
日	/		当	成	成	得	日
科	作	○	作	成	成	得	科
備考							備考

跡抄も、是訓は割合よく注してある。漢字訓が示されてゐない場合にも、その箇所と言及してゐるものが多い。92ヶ所中、72ヶ所に言及があり、56ヶ所是訓、4ヶ所に漢字訓なくてコレ和訓がある。他は1ヶ所、是訓を不可として作訓ともるものがあり(No.103)、11ヶ所は本文を掲げるのみである。日相本は75ヶ所に是訓がある。ここでも、日相本は別訓が多い(No.103作、No.306以、No.419 424 436 442作是)。科注は72ヶ所に付訓があり、71ヶ所が是訓、他1ヶ所は作訓(No.436)、無訓20ヶ所である。

以上のうち、是訓がどうしても不適と思はれるものが1例ある(No.146)ほかは、ほぼ是訓が適當する。

B類は1例のみ。他に、為為章で、同類を一括する場合に、一括すべき数を誤つてゐるものがあるが、それは修正したので、B類(不掲載)扱ひはしなかつた。No.475は同類のものがないので(類似句はあるが)、1例であるが不掲載の扱ひをした。

C類は、為為章では訓単独例4例、複数訓中に是訓あるもの6例、計10例である。この内、為為章の是以外の訓と補注訓の一致するのは2例のみ、No.269 270では補注成訓であるが、為為章の作訓に対応すると見られる。立本はNo.269 273で為為章に部分的に一致、龍本は6ヶ所に漢字訓がある内、5ヶ所が全部又は部分的に為為章に一致する。他1ヶ所は補注に一致する。文段経以下は、全体に補注に近い(No.49 65 66 115 273 470 602 610)。No.151が与訓でなければならぬのを除き、他9例は、是訓でも補注の訓でも通じるといふものである。

D類は7例。No.437は為為章訓定、補注訓是のいづれともいひにくいだが、他6例は補注訓がよりよい。しかし、No.86で龍本はやはり為為章に一致する。ここでは龍本4ヶ所該当するものがあるが、半々に為為章と補注に一致する。7例中、3例(No.86 95 497)は為為章訓でもよいが、他は是訓が適當すると思はれる。

E類、為為章・補注とも他訓で、他のいづれかの書に是訓のみられるもので、13例(内1例は、「句解」に是とあるもの、これは基準が少し違ふので除けば12例)、内3例(No.219 519 522)は為為章・補注訓が適當するが、他の10例はいづれでもよいといふものである。一々については後述する。

以上を通じてみると、

為為章是訓 103例(内重複訓中に是訓あるもの7例、不掲載なるも是訓適當のもの1例)

補注是訓 100例(内重複訓中に是訓あるもの2例)となる。

是訓為字には繋辞の意味が強調されるもの、つまり、他に何らの意味もそへぬものもあるが、別の面を重視すれば、他訓を注することのできるものもある。従つて、是訓で絶対不可であるものは、B・E 31例を通じ、僅か4例(No.151 219 519 522)しかなかつた。換言すれば、適否の判断は極めて難しいともいへるのである。この絶対不可のものを除き、是以外の訓としてあらはれてくるものをみると、為為章では、作:10・定:4・当:4・名:2・得:1・与:1であり、補注で

は、作…3・成…4・定…6・当…3・名…2・得…1である。平声訓の内、由・求・被が出てくることはない。№151219519以外にも去声の与訓が出てくるが、これは全く不適切な訓である。右のやうな訓によつても是訓為字の意味合が知られるであらう。

三(2) 是訓為字の和訓

古点本における是訓為字の和訓はことごとくコレである。全訓が示されることもあるし(立本№214217218222223222等)、レのみが、仮名またはヲコト点で示されることもある。

A類で、龍本の№64163386に、タメニ・タメニ・マサニが出てくるが、これは是訓の和訓としてではなく、前二者は無訓、三つめは当訓の和訓化である。何故かうしたかは別問題である(№64などは無訓であること、その句読から来てゐる。つまり、前句の「自惟失此利」と「我為自欺誑」を関連づけて、前句を後句の原因の如く読んだために、為をタメニとしてしまったと思はれる。尤も、漢字訓はもともとなかつたのではなく、右のやうに考へて無視してしまつたのかも^{註1}しれない。

是訓であれば、コレと和訓してゐることは、C類以下でもみてとれる(C類の№49115、D類№4620051)。ただ、これが、足利本、倭点になると、…トスとあらはれたり、タリであつたり、…ニ(ト)ナルであつたりする。足利本はマシマス(タリの敬体)も用ゐる。足利本にはコレも為字和訓として僅かに用ゐられるが、倭点^{註2}は用ゐてゐない。倭点では、是訓為字に対して、ス(…トシテも含む)、ナル、タリ^{註3}があてられ

法華経為字和訓考(田島毓堂)

てゐる。A類の為字に対して、足利本の和訓は、コレ18、ス43、タリ17、マシマス2、ナル10、タメニ2であり、倭点のそれは、ス70、タリ9、ナル10、ナス1、タメニ2である。

文段経は、是訓である限りコレ一色である。尋跡抄も同様である。№163は補注是訓を不可として句解の作訓を採用し、従つて和訓もスである。頂妙寺版初版・文久版はともにすべて文段経に従つてゐる。C類E類の是訓以外のものに至るまですべて一致する。但し、文段経で二つの和訓を与へてゐるものについては、いづれか一方をとる。明治版における改訓により、AB類93例中、28ヶ所で和訓が変更されてゐる。28例の内わけは、コレ↓ス(25例)、コレ↓ナス・タリ・タメニが各1例である。D類7例中、1ヶ所がコレ↓ス、E類では、サダメテ↓ス(1例)、ナツク↓ス(1例)、ベシ↓コレ(1例)といふ変更がある。全体にコレが減り、スが増えてゐる。一般的にいへば、コレなる訓が殆んど無意味に近く置かれてゐるものを改訓したものである。一々については後述する。

平安朝古点でコレであつたのが、中世資料ではコレは激減し(足利本18例、倭点0例)、スが激増してゐる(足利本43例、倭点70例)。その他、ナス・ナル・タリ(マシマス)があり、…ノタメニ…ラルもあつた。それが近世の、文段経で再びコレ一色となり、頂妙寺版がこれをうけつぎ、頂妙寺版明治十八年版の改訓は、この、ほぼ三割にあたるものを変更した。その大部分はスである。そして、近代の訓読を法華経普及会の「訓訳妙法蓮華経」で代表させるならば、それは、頂妙寺版改

訂版の忠実な訳文で、その間の相違は、A類で僅かにス↓ナスが1例(Na.163)、E類まで含めても、もう1例ス↓ナスがあるだけである(Na.87)。従つて、近代訓読においては、頂妙寺版の改訓を源と考へることが出来、是訓為字の和訓はコレ(63例)とス(25例)であるといつてよい。他に、わづかにナス(2例)、タリ(1例)がまじるが。タメニは是訓為字の和訓とは考へない。

なほ、意味について一言すれば、「…ハ…デアル」の意をあらはすのが本義、それを、「コレ…ナリ」と和訓し、又「…ヲ…トス(ナス)」「…タリ」と和訓するのである。コレが是訓為字の和訓の本流の如きであるが、「以レ為」を、コレヲモツテとよみよみ方、つまりコレに助詞のついた用法は、少々本筋からはづれることになる。すなはち、コレ…ナリ全体で、是訓為字に相当する和訓であるといふことである。本稿末(表四)には是訓為字和訓変遷簡易一覧表を掲げた。合はせ御覧頂きたい。

三9(3) 是訓為字例

A~E類の順に従つて、若干例を掲げて検討する。

三9(3)a A類(為為章・補注とも是訓)

〔111〕No.7 又見^ル菩薩寂然^ニ冥默^ス 天龍恭敬^ス 不^レ以^テ為^レ喜^ト

(序品 大正蔵九卷三頁a.29)

②立本 以て為レ喜ハ^不るを(5頁上)

③龍本 為^レを以^テ喜^ヒ不^ス(9頁)

④足利本 もてよろこひとせざるを(二卷101行)

⑤倭点 不^レ以^テ為^レ喜^ト(二卷101行)

⑥文段経 不^レ以^テ為^レ喜^ト(68頁)

⑦尋跡抄 不^レ以^テ為^レ喜^ト(165頁)

⑧頂妙寺版(明治版) 不^レ以^テ為^レ喜^ト

(本文の掲出法は前稿同様とする。)〔は掲出例の通番。No.は法華経為字の通番。掲出例の訓点は頂妙寺版初版による。立本…立本寺蔵本・門前正彦氏『立本 妙法蓮華経古点』昭43・12、龍本…龍光院蔵本・大坪併治氏『訓点資料の研究』昭43・6、足利本…足利本仮名書き法華経・中田祝夫氏『足利本仮名書き法華経翻字篇』昭51・9、倭点…心空刊倭点法華経・日本古典全集『倭点法華経』上下、文段経…日遠聖人文段経妙法蓮華経・本満寺刊複製昭48・1、尋跡抄…日遠聖人法華訳和尋跡抄・兜木正亨氏解説『法華音義類聚』乾巻昭46・7)

立本、龍本はともに是訓によりコレとよんでゐるが、龍本はコレヲ以テであり、適切ではない。立本のみ方もぎこちない。足利本、倭点は「以テ喜ビトセザル」である。文段経のレ点は誤刻と思はれるが、とすればこれ又龍本のように戻つてゐる。頂妙寺版もこれによるが、明治版では「以テ喜ビトセザル」と改訓してゐる。近世、近代の訓読は、コレ系とス系に分れる。コレ系は、妙満寺版、深川、島地、大蔵経、新纂、注、新注、如注、倫注、ス系は平楽寺版、訓点校正、山川、訓訳、一切経、国語、明和堂版、大石寺版である。ナスとするものもある(織田、岩波)。頂妙寺版で改訓の施されたものは、近代訓

読において、いろいろに分れる傾向があるが、この例はそれである。この例、是訓を生かしてコレとよむと、コレヲ以テとよみたくなるのであらうが、これは前述の如く是訓為字の本義を如実に反映しない。コレを生かしてこの意味をうまく表はすのは少々むづかしい。従つて「トセザル」とよむのが次善であらうが、これが否定表現ゆゑ状態性を表はしてゐる。スとよんでゐるが、コレヲ以テよりはよいし、立本如きよみはかへつてまづい（十分な日本語になつてゐるか疑はしい）。ナスとよむのもスと同じやうなものではあるが、ナスはスにくらべ動作性が強調され、よくない。是訓が十分生かしにくかつた例である。但し、No. 90 非為虚妄を「これ虚妄に非ず」とよむのは是訓も本義も生かしてゐる。No. 343 未足為難、No. 344 345 347 349 351 353 357 359 亦未為難も、立本「為レ難しとスルニ足ラ未」、龍本「為レ難きに足(ら)未」文段経、頂妙寺版初版「未_ス足_ニ為_レ難_ト」、頂妙寺版明治版「未_ス足_レ為_レ難_ト」、立本「亦為レ難カラ未」、龍本「亦為レ難(き)に(あら)未」、文段経、頂妙寺版初版「亦未_ス為_レ難_ト」、頂妙寺版明治版「亦未_ス為_レ難_ト」である。亦未為難の方のコレはともかく、未足為難のコレはどうしても代名詞的ひびきを脱しきれない。亦未為難のコレの如きが、否定表現では是訓為字の是訓の生かし方であらうが、実は、その意義の大半が「あらず」の部分にこめられてゐるのであつて、コレの部分には大した意味はなく、為字をコレとよんでも、為字の本義は、下にくるナリ類にこめられるのである。換言すれば、以上の如き是訓為字は、コレができるだけ無意味である方が、和訓としては適すること

法華経為字和訓考(田島毓堂)

とになり、一旦、代名詞的働きをもつと忽ち不適切となるのである。

[112] No. 19 汝_ハ為_レ世間_ノ眼_ニ一切_ノ所_ニ歸_ル信_ニ能_ク奉_ス持_ス法_ノ藏_ト

(序品 五a)

②立本 汝_ハ為_レ世間_ノ眼_ニなり(10頁下)

③足利本 なたちはせけんまなこたり(一四四)

④文段経 汝_ハ為_レ世間_ノ眼_ニ(79頁)

この例は肯定表現であるが、文段経以下では中止法的用法となつてゐる。つまり「コレ：、」型である。龍本は立本と同じ、頂妙寺版は各版とも文段経と同じである。

コレ：ナリ型、タリ型、コレ：型がある。コレ：ナリ型は、右②のほか、山川、大蔵経、新纂、タリ型は、右③のほか、平樂寺版、織田、訓点校正、科注、倫注、コレ：型は、頂妙寺版、妙満寺版、深川、訓訳、注、一切経、国語、対照、明和堂版、大石寺版等である。コレ：型は、コレ：ナリ型の変形とみてよい。岩波は「為_レ世間_ノ眼_ニにして」である。ナリもタリもなく、ニシテもなくコレ：だけで、「汝はコレ世間の眼」で、汝||世間の眼であることを示してゐるから、コレが繫辭そのものともいへさうであるが、この関係は、もともと何もなくとも二語を並べるだけで示すことのできるものなのであつて、このことによつて、コレを繫辭とみることは出来ない。コレはむしろそれを強調的に示す。この様子は、No. 49 此事為不可でもみてとれる。すなはち、ここでは、為_レ是也とするもの、定也とするものがあるが、定也とするものは「サダメテ不可なり」とよむが、このサダメテとコレ

とは同様の役割、つまり陳述副詞的役割を果す。サダメテと強い調子のついたもの、コレと若干の強調を示すものである。以上の如き議論にもかかわらず、このコレを便宜的に繋辞的用法と称するものに含める。強調的意味合は為字本来がもつてゐたのではなく、訓読によつて生じたものと考へるからである。すなはち、為_レ是_レコレ_レ（ナリ）といふ経路によつて、コレは生じてゐるが、為字本来の意味は、（ナリ）の部分にあらはされ、コレは是訓ゆゑに生じはしたが、本来の意味はにはなされてはゐない（コレの指示語としての本性により、その意味をになふことは可能だつたと思ふが）。その結果、訓読文独自のものとしての意味が付与されたと考へられる。

No.29 我_レ 為_レ佛_レ 長子_レ 唯_レ垂_レ 分別_レ説_レ もよく似てゐる。この掲載例は頂妙寺版初版の訓点で、文段経、尋跡抄、妙満寺版も同じ、立本、龍本「為_レ長子_レなり」、足利本、倭点「ちやうしたり」「為_レ長子_レ」、頂妙寺版明治版で「為_レ長子_レ」とナリが加へられ、以下、コレ_レナリの型に安定する。No.1214などと同類である。No.419於_レ三_レ界_レ中_レ為_レ大法王_レも同類だが、足利本、倭点「大法の王として」「為_レ大法王_レ」と中止形となつてゐる。文段経、頂妙寺版はコレ_レ型で、この例は近代訓読で「タリ」「コレ_レ」となる。

以上は、文の完結してゐるものと、中止形をとつてゐるものがまじりあつた例である。

[113] No.96 便_レ作_レ是_レ念_レ我_レ為_レ衆生_レ之父_レ（譬喻品 十三a 27）

②足利本 われ衆生のちゝたり(二388)

③文段経 我_レ為_レ衆生_レ父_レ (129頁)

前例に対し、この例は、コレ_レナリ又は_レタリと完結したものである。但し、下文「応_レ下_レ拔_レ其_レ苦_レ難_レ與_レ無_レ量_レ無_レ辺_レ佛_レ智_レ慧_レ樂_レ令_レ其_レ遊_レ戲_レ」(頂妙寺版初版訓点)との関係で、「衆生の父なれば」とするものが、山川、岩波にみられるが、この二書は若干通例の訓読とは異つた趣をもつものなので、分類の標準とはしない。すべて「タリ」か、「コレ_レナリ」である。タリ型は、足利本、倭点、織田、訓点校正、非思量本、倫注、科注である。コレ_レナリは文段経、尋跡抄、頂妙寺版、平樂寺版、妙満寺版、深川、島地、訓訳、大蔵経、伊藤、河原、一切経、新纂、注、国語、小林、対照、明和堂版、大石寺版である。頂妙寺版で改訓のないものは、近代諸訓読はほぼそれに従ふ。織田、訓点校正、非思量本は全く別である。

頂妙寺版が、明治版で改訓した例として、No.213 214 為_レ大徳_レ天生_レ 為_レ佛_レ出_レ世間_レを「為_レ大徳_レ天生_レ 為_レ佛_レ出_レ世間_レ」_レとよむ一連のもの(No.217 218、222 223、225 226)がある。これはいづれも選択疑問を示す例である。No.10 11、26 27、65 66は「和訓考(三)」で扱つた如く定訓がつけられてゐるが、右の各例は是訓であつたためもあつてか、「コレ_レヤ、コレ_レヤ」が「トヤセン、トヤセン」に落ちつた。但し、近代訓読中、島地、大蔵経、新纂及び小林は改訓前の和訓に従つてゐる。かういふ傾向はほかにもみられる。

[113]と同様のものとしてはNo.62 92 106 436(足利本もコレ) 546がある。

No.118 貪_レ欲_レ為_レ本_レは、足利本、倭点グループは「ほん_レとす(為_レ本_レ)」

である。そのほか、No. 149 277 342 533 がこの類である。これと少し違ふものとして No. 176 我^ハ為^レ如^レ来^ト兩^ノ足^ヲ之^ノ尊^トがある。足利本はコレ：ナリとし、倭点は「我^ハ為^レ如^レ来^ト兩^ノ足^ヲ之^ノ尊^ト」と二文にする。織田、訓点校正、非思量本はタリである。No. 177 も足利本コレ：ナリ、倭点トスで同様のケースである。No. 427 531 も足利本と倭点のくひ違ふものである。また、足利本タリ—倭点トスとなるものがある。No. 535 最為其尊は、足利本「もともその尊たり」、倭点「最為其尊」(織田が同じ、訓点校正は和訓不明、非思量本「為す」)である。

以上は、古点本、文段経以下がコレ：ナリとするものを、足利本、倭点でタリ、トスとしてゐたもので、その組合せはいろいろあつた。又、No. 176 で倭点は如来兩足之尊を途中で切つてしまつたが、少し長くなるど解釈の差も出て来てかういふことも起る。次例はそれである。

[114] No. 463 我^ハ亦^モ為^レ世^ノ父^ト 救^フ諸^ノ苦^ノ患^ノ者^ト (寿量品 四三・26)

(救の一点は誤刻)

② 龍本 我^レも亦^モ為^レ世^ノの父^トなり、諸^ノの苦^ノ患^ノを救^フ者^トなり

(151頁)

③ 足利本 われもまたよのちとして、もろくのくくえんをすく

ふ物なり(六四)

④ 文段経 我^ハ亦^モ為^レ世^ノ父^ト 救^フ諸^ノ苦^ノ患^ノ者^ト (351頁)

龍本は二文に切る。足利本は、これを「として」で次につづける。倭点、山川、岩波もかうしてゐる。又、織田、訓点校正、非思量本は「世の父たり」と切つてゐる。

法華経為字和訓考(田島鏡堂)

ただ、文段経、頂妙寺版以下の近代諸訓読の「コレ世ノ父、：者ナリ」は[112]の中止の形、つまりコレ：型の如くもとれるが、「：者」までがかがつてゐるとみてコレ：ナリ型と考へておく。

以上は、いづれも中止又は終止の例であつたが、下へつづく(原漢文では上につづく)ものもある。が本質的には同じことである。一例のみである。例示しておかう。

[115] No. 541 如^ク為^レ諸^ノ法^ト王^ト 此^ノ経^ハ亦^モ復^ス如^ク是^ト (藥王品 五四b 10)

② 立本 佛^ハの為^レ諸^ノ法^トの王^トタルカ如^ク此^ノ(の)経^ハも亦^モ復^ス是^ト(の)如^ク(し) (101頁上)

③ 足利本 ほとけの諸法の王とましますかこくこの経もまたかくのこし(七四)

④ 倭点 如^ク佛^ハ為^レ諸^ノ法^ト王^ト 此^ノ経^ハ亦^モ復^ス如^ク是^ト (七〇)

龍本は立本と同じ。文段経は掲出例の頂妙寺版初版と同じ。以下、頂妙寺版各版、近代諸訓読もよみ方は等しい。足利本マシマスはタリの敬体である。足利本にはマシマス4例あり、イマスも1例ある。

倭点にもマシマス1例ある。但し、是訓為字の和訓としては、この例とNo. 106とである。

この例は、ただ、タリ、コレ：ナリで切れずに下につづくといふのみで、よみ方に特に問題はない。

以上は、：タリ、コレ：ナリの：の部分名詞であつたが、次に情態性の語のあるものを例示しよう。本質的には以上のものとかはらないが、後述の、句を受けるものとの接点をなすものである。

〔116〕No. 172 甚^レ為^レ希有^{ナリ}(葉草品 一九c7)

②立本 甚^{是也}為^レ希有^{ナリ}(29頁上)

③足利本 はなはたけうなりとす(三88)

よみ方は簡単であり、〔113〕と本質的には同じである。コレ：ナリと、トスの二種である。他に、織田「為^レ希有^{ナリ}」、非思量本「希有と為^レし」などもあるが、「：トス」の系統である。No. 232 442 (足利本コレ)は全く同文である。No. 271 (慶)、No. 294 (難信難解)、No. 392 (難有)、No. 420 (甚深)、No. 421 (大失)、No. 529 (深大)、No. 530 532 534 536 537 538 539 540 (第一)がこれである。(一)内が：にあたる部分。以上は、頂妙寺版各版、近代諸訓読で大概コレ：ナリとしてゐるものである。足利本も、No. 232 271 392 420 421 ではコレとする。又、No. 413 は則^レ為^レ大失^{ナリ}、如来、方便、随宜、説法^{ナリ}で則^レ為^レ大失^{ナリ}と同じだが〔118〕に含めるべきものである。No. 421 では「大失」が「斯等、不^レ聞^ニ不^レ信^ニ是^レ経^{ナリ}、則^レ為^レ大失^{ナリ}」と一つの情態言の如く用ゐられてゐることに注目して右に含めた。コレ：ナリとはよんでゐないが。

〔117〕No. 348 是^レ則^レ為^レ難^シ(宝塔品 三四a23)

②立本 是^レ則^レ為^レ難^シ(67頁下)

③足利本 これすなはちかたしとす(四104)

④文段経 是^レ則^レ為^レ難^シ(280頁)

⑤頂妙寺版明治版 是^レ則^レ為^レ難^シ

この例、頂妙寺版は明治版で改訓され、為^レ難^トとされた。近代諸訓読は頂妙寺版初版に依拠したと思はれる島地が「是^レ則^レ為^レ難^シ」とする

ほか「難しとす(又は「なす」)である。No. 350 352 355 358 360が同文である。

No. 487 寧^コ為^レ多^不が同じく頂妙寺版明治版改訓で「寧^コ為^レ多^不」

とされてゐる。訓読はコレ系と、センヤ系にわかれ、近代の訓読も、No. 348よりはコレ系が多くある。

コレ系は、龍本、足利本、文段経、尋跡抄、頂妙寺版天保、文久兩版、妙満寺版、深川、島地、注、大藏経、新纂、岩波である。一切経は「寧ろ為れ多しとせんや不^レや」であるが、やはりコレ系であらう。No. 595が同文で、頂妙寺版改訓の事情は同じであるが、コレ系から、足利本、深川、注、一切経がス系にかはり、平樂寺版が逆にコレ系にうつてゐる。かういふ差はあるが、根本的な差はない。

前にも述べたが、一般に頂妙寺版で改訓のあるものは、近代諸訓読は多くは改訓されたものに従ふ。この例は、少々それが区々になつたものである。

〔118〕No. 61 則^レ為^レ已^ニ供^ニ養^{スル}一切三世佛^{ナリ}(方便品 一〇b2)

②山田本 「則」已に一切の三世の佛を供養(し)タテマツル(に)為^スぬ(270行)

③立本 為^{是也}レ已に：を供養シタテマツルなり(26頁上)

④足利本 すなはちすでに：をくやうせるになりぬ(二119)

⑤倭点 則^{ナレ}為^レ下^ニ已^ニ供^ニ中^ニ養^{スル}：佛^{ナリ}(一500)

⑥文段経 則^{ナレ}為^レ已^ニ供^ニ養^{スル}：佛^{ナリ}(108)

頂妙寺版は各版とも、近代諸訓読も、織田、訓点校正、非思量本(：供養すと為す)を除き、すべて「為れ：供養するなり」である。ナリ

又とするのは、山田本、足利本、倭点、平樂寺版で、山田本の訓読は立本、龍本にみられるやうな漢字訓の影響を受けない。又、山田本の訓読が立本、龍本の訓読に影響を与へてゐない。

右の場合、「コレ…ナリ」の…部分は「已供養一切三世佛」といふ句になつてゐる。かういふ例では「コレ…ナリ」のナリは必ずしもあらはれるとは限らない。No.64我為自欺誑の如く、文末の述語の中に吸収されてゐるものがある。

No.91便為已得^{チコレ} 玩好之具^{タルレ}、No.123若人有^シ能信^{スルコト}汝所^カ説^フ則為^シ見^ル我^ニ亦見^ル於^ニ汝^ニ及^ヒ比丘僧并諸菩薩^ハはじめ、

No.148 163 274 339 362 386 413 469 472 474 477 481 482 521 596 598 600が同類である。この内、No.148は「便為不異^{チコレ}」と為字下の部分が短かい。又No.274 386は「謂為^{ナリ}」といふつづきで、訓読は「コレ(為)…トオモヘリ(謂)」であるが、「謂為」二字で「…と思ひ違ひをする」の意であることは前に述べた。

左に他の若干例を掲げておく。

No.339 則為^{コレ}供^{スル}養^ス 我^レ及^ヒ多^ク宝^ヲ (宝塔品)

No.362 是^{コレ}為^シ疾^ク得^テ無^ク上^ニ佛^道 (宝塔品)

No.469 則為^{コレ}見^ル佛^常在^ニ普^閻嶮^山共^ニ大^ニ菩^薩諸^ノ声^聞衆^ヲ、
因^ニ纏^ル説^法上^ニ又^ニ見^ル此^ノ娑^婆世^界…其^ノ菩^薩衆^咸處^ニ其^ノ中^ニ (分別品)

No.481 是^{コレ}則^チ為^シ具^足一^切諸^ノ供^養以^テ舍^リ利^ヲ起^シ塔^ヲ七^宝而^以、
莊^嚴表^利甚^高廣^漸小^至三^寶天^宝鈴^千万^億、
風^ノ動^出妙^音又^於無^量劫^而供^養此^ノ塔^華香

法華経為字和訓考(田島統堂)

諸^ノ瓔^珞天^衣衆^伎樂^然香^油蘇^燈周^市常^照
明^{スル} (分別品)
No.596 則^{コレ}為^シ侵^ス毀^ス是^ノ諸^ノ佛^已 (陀羅尼品)

これらは、^[111]と^[117]で為字下が語であつたのが句となり、為字は上下を「である」と結びつける役目を果す。従つて、下句が動詞で終れば、その意はその中に含まれてしまふこともある。かういふ意味合を示すものであるから、コレは殆んど無色であることが多いが、しかし、一旦コレとよむことによつて一種の意味合が付与され、強調の如くなることのあることも前述のとほりである。

ただし、このコレ…(ナリ)のよみ方は、ここの例のやうに、為字下に句がくる場合、十分なよみとはいへぬにしても、極めて巧妙なよみであるとはいへる。これは、為字下が一語の場合でも同様ではあるが、それが長くなつた場合など、わざわざ文の最後になつてから、この為字にかへらなくてもよいからである。この点、「言」などをイハクと先によんでしまつたのと同趣である。そして、イハクの場合も、引用の末尾にト、トイフなどがついたりつかなくなつたりする如く、この場合も、ナリでうけたり、うけなかつたり(他の動詞等に吸収された)りする。漢文の字順を考へた工夫である。

なほ、この場合、為字の上は名詞がくるか副詞であることが多く、動詞は余りこない。動詞の場合は、為字を含んだ以下全体にその動詞がかかる形になる。「未足為難」は「為難」を「足らず」とするので

あるが、かういふ例は少ない。

No. 274 而^{ルラ}汝^{オモヘリ}謂^{コト}為^ニ実^ニ得^ニ滅^ニ度^ニ (五百弟子品) の如き、又、No. 386 惡^セ世^ニ中^ニ比^テ丘^ヲ邪^ニ智^ヲ心^ヲ諂^ニ曲^ニ未^レ得^ニ謂^ニ為^ニ得^ニ一^ニ我^ノ慢^ノ心^ヲ充^テ滿^セ (勸持品) の「謂為」は前述の如く、この二字で「…と思ひちがひをする」意になるが、実は、謂字をオモフとよむときにはいつもこのニュアンスがともなふ(このことについてはいつれ詳しく述べたいと思つてゐる。法華經中に限らぬ。そして、これは、さらに、日本語としての「…トオモヘリ」自体にすでにサウデハナイコトヲサウダトオモヒコンデキルといつた意味合があることに気づく。単に思ツテキルのではない場合が大半である)。従つて、必ずしも謂為二字でオモヒチガヒスル意となるのではないかも知れない。謂で為字以下をその内容とするのであり、同時に、その内容が事実反することになるといふことである。かういふ用法が慣用され、謂為といつた連文ができあがつたといふものではなからうか。

ただし、為字上に動詞がくるといふ用法は多くはない。
なほ、No. 386 は龍本で当訓としてゐるがさうは考へにくい。
かういつた為字の用法を見てくると、次の例も考へやすい。

[119] No. 278 又我等^ハ為^レ一切世間^ノ天人阿修羅^ノ所^ニ見^ル知識^ニ

(人記品 二九b26)

②立 本 為^レ一切世間の天人阿修羅に知識(せ)見^ルレタル所なり

(60頁下)

③龍 本 為^レ一切世間の天人阿修羅に知識せ見^ルれたる所なり

(88頁)

④足利本 またわれらは一さひせけん^ノ天人あしゆらのためにちし

きせられたるところなり(四廻)

⑤倭点 又我等^ハ為^レ一切世間^ノ天人阿脩羅^ノ所^ニ見^ル知識^ニ

知識^ニ (四廻)

⑥文段経 又我等^ハ為^レ一切世間^ノ天人阿脩羅^ノ所^ニ見^ル知識^ニ

(244頁)

この例、コレ：知識セラレタル所ナリ・コレ：知識セラルとよむか、
：ノタメニ知識セラレタル所ナリ・：ノタメニ知識セラルとよむかに
分れる。為字の訓み方からすれば、コレか、タメニである。「所見」
も組合せてみれば、「所見」を一つの受身にとると、「所」をトコロ
とよむのとがあり、右記4種になる。

タメニとよむのは、足利本、倭点、織田、訓点校正、非思量本で、
この内、「所ナリ」とするのは、足利本、倭点である。立本・龍本は
掲出のとほり、コレ：知識セラレタル所ナリである。文段経以下は、
コレ：知識セラレタリであるが、「為―所見知識」全体を一つの受身
に解するものはない。見字が中心になつて受身をあらはすからである
と思はれる。一見「我等」以下全体が受身にとられさうであるが、こ
の文のいはんとするところは、単に「我等が：に知識せらる」という
事実の記述ではなく、「我等は、：に知識せられてゐるものである」と
といふ判断を示す。その働きが為字に課せられてゐる。従つて、織田
以下のタメニ：知識セラレタリでは不十分であるし、文段経、頂妙寺
版以下で、為をコレとしてゐるものも、「：知識セラル」で終つてし

まつては尻切れの感を免れない。ナリはセラルルの中には吸収されてる
ない。所字をトコロとよむか否かはともかくとして、「知識セラルル
(所)ナリ」のナリは是非必要である。為の働きは前述の一連のもの
と同じであるが、この例は、それをコレだけでは表はしきれなかつた
ものである。為字の働きについて次例はどうであらうか。

[120] No. 146 父^{アキカニ}知^レ其^子志^{下劣}意^自下^ニ劣^自知^ニ豪^貴為^子所^レ難^一

審^{アキカニ}知^レ是^子而^以三方^便不^下語^一佗^人云^中是^我子^上

(信解品 一七a3)

②龍 本 為^是れ子^ハの難^{シキ}所^{ナリ}と(65頁)

③足利本 このためには、からると(二94)

④文段経 為^レ子^所難^一(156頁)

このよみ方は、「コレ子の難かる所ナリ」「子ノタメニ難からる」が大
半で、他はこの小変異である。山川は「子に難かられたり」と完全に
受身によんでゐる。この例、諸書一致して是訓であるから、十分考慮
すべきではあるが、この為字は、上述の為のやうには考へにくい。上
の「知」の内容は「豪貴為子所難」である。「豪貴」であることと、
「為子所難」は並列でも因果関係でもよからうが(後者の方がわかりよ
い)、ともに「知」の内容である。この文字列からは、今までの例の
やうに、「豪貴」と「子所難」をつなぐものとは考へにくい。受身構
文とみるのが穩当であらう。これを、「難る所なり」とよむことの当
否は別として、受身表現とすれば、為をコレとよむのは不適當であら
う。

法華経為字和訓考(田島毓堂)

なほ、難字をハバカルとよむことは、すでに名義抄(観智院本、僧中
130、ハ、カル上上濁上平)にみえ、遠慮する、つつしみを感じる、さら
ふ等の意である。

この例、頂妙寺版は明治版で改訓して「為^レ子^所難^一」とした。近
代諸訓読は、コレ系とタメ系に分れる。コレ系は深川、島地、注、小林
で、他は、大体改訓本に従ふ。織田、非思量本は「子の難る所と為
る」である。なほ、龍本のヤマシキ所とよむのは、難字の訓自体とし
てはありうるが、この漢文のよみとしては不適當である。難を形容詞
としてよむならふつうは「難所」とあるべきである。

この例は、是訓によつてコレとよむのが多いが、それを十分生かす
ことは困難である。さらに、為為章本文について憶測めいたことをい
ふならば、この一つ前のNo. 145何為見捉に得訓が注され、この不適切な
ことはすでにのべたが、「和訓考二」12(13頁)、この前後、何か混乱
がありはしまいかと思はれる。

以上、為為章・補注とも是訓である92例について検討した。ここで
は、是訓不適用は最後にのべた一例のみで、他は大むね是訓によつて
理解できた(但し、和訓についてはコレでいいとはいひきれなかつた)。

三9(3)b B類(為為章不掲載、補注是訓)

[121] No. 475 則^レ為^以佛^舍利^起七^宝塔^高廣^漸小^至于^梵

天^縣諸^庵蓋^及衆^宝鈴^華香^瓔珞^抹香^塗香^燒

名古屋大学文学部研究論集(文学)

香衆鼓伎楽 簫笛篳篥種種 舞戯^{アテ} 以^ニ妙^{ナル} 音声^ニ

歌唄讚頌^{スル} (分別品 四五b29)

②龍本 則^レ爲^レ佛舍利を以^テ…歌唄讚頌するなり(111頁)

③足利本 則ち佛舍利をもて…讚頌するにたりぬ(207頁下、摩尼園蔵版による)

④倭点 則^レ爲^レ以^ニ佛舍利^ヲ…歌唄讚頌^{スルニ}(六217)

⑤文段経 則^レ爲^レ以^ニ佛舍利^ヲ…讚頌^{スル} 則^レ爲^レ已^ニ…作^ニ是^ノ 供養^ニ已^ル(363頁)

この例はNo.474とほぼ同様の例であり、為為章でこの例を掲載してゐないといふだけである。他例と合併して掲載してゐるとも考へにくいので、為為章不掲載とした。No.474は表示したやうにA類である。なほ、No.471も同じく分別功德品の例で、為為章不掲載であるが、是訓に入れず名訓例とした。

この例は、[118]の例と基本的に同じである。各本のみ方も同じくコレ…ナリ型、ナリヌ型がある。ナリヌ型は、足利本、倭点、平楽寺版(織田、訓点校正、非思量本は「…讚頌ストナス」である)、これもNo.474と同様である。為為章不掲載である点のみが異なるが、他はすべてA類と同様である。

三9(3)c C類(為為章是訓・補注他訓)

C類10例は、表一にみるやうに、No.49 65 66 115 602は補注「定」、この内No.65 66は為為章にも「定」がある。又、No.602には為為章「当」もあ

る。No.269 273は補注「成」、為為章には「是」の他に「作」がある。作と成は違ふといへば違ふが、通じる点のあることも事実で、以上4例(No.65 66 269 273)は部分的に為為章、補注が等しいといへる。ほか、No.151 作是…与(上…為為章訓、下…補注訓)、No.470 是…名、No.610 是…作である。

この内、No.151は為為章訓二つとも不適、補注の与訓が適する。この他は、為為章訓でも補注訓でも、どちらでもよいが、しひていへば、是訓以外の訓が、それだけ文脈的に詳しく付訓されてゐるともいへる。

一々の例については、No.49 65 66 115 602は和訓考(四)に述べ、No.602は和訓考(四)でも言及した。是で必ずしも不可ではないが、定訓、当訓も疑問、確信、推定をあらはすに適してゐた。ただ、No.602にあらはれてゐる作訓(日相本)は感心できない。以上の例、該当箇所を掲示しておかう。

No.49 此事^ノ為^レ不可^ル(方便品)

No.65 66 為^レ失^ル 為^レ不^レ失^ル(譬喩品)

No.115 為^レ無^レ有^レ上^ニ(譬喩品)

No.602 汝^ガ等^ガ師^ヲ為^レ是誰^ニ(嚴王品)

No.269 273は和訓考(四)(19頁)において作訓の方を可とした。同様の例(105)

No.267の項でのべたことはこの2例にも通じる。

No.269 便^ニ以^テ為^レ足^ス(五百品)

No.273 得^レ少^キ 為^レ足^ス(同右)

つた相を呈する。いづれも補注訓によつてゐること明確で、それで特に問題はないが、是訓が全く不可でもないことのみをいつておかう。

が、この例は、名訓例とすべきものである。

〔124〕No. 151 不_レ為_二分_三別_一 汝_ハ当_レ有_ル如_レ来_、知_見宝_藏之_分 (信解品 一七b25)

② 龍 本 為_レに…と分別したまは_不す (70頁)

③ 足利本 ために…とふむへつしたまはず (二106)

いづれもタメニ…である。この例、為_レ為_レ章の訓「作是」、「補注「与」とあるほかには漢字訓ない。「分別」を「為_レす」とはよみにくい。与訓が適する例である。C類中、是訓では全く通じない唯一の例である。ただし、逆に是訓でなければならぬものは一つもなかった。

三9(3)d D類 (為_レ為_レ章他訓・補注是訓)

為_レ為_レ章が是訓以外で、補注に是訓がある7例である。この内、為_レ為_レ章訓でもよいものは3例 (No. 86 95 97) で、他の4例はいづれも是訓が適すると思はれる。

〔125〕No. 46 我_ガ此_、九_部法_、随_順衆_生説_入大_乗為_レ本 (方便品 八a7)

② 立 本 大_乗に_入ルに_為レ本_{なり} (20頁上)

③ 足利本 大_乗に_在るに_ほん_{たり} (一913)

④ 倭 点 入_二大_乗為_レ本 (一401)

⑤ 文段経 入_二大_乗為_レ本 (98頁)

為_レ為_レ章与訓、補注是訓。織田、訓点校正、非思量本は「大乗に入るを本とす」であるが、「我が此の九部の法」は決して「大乗に入るを本とす」ではなく、本乗に入るための本であらう。織田等以外のよみを可とする。コレとよむにしろ、…トスとよむにしろ。足利本のよみが適する。

No. 86 何_者為_レ舎_ハ、為_レ為_レ章「名」、龍本が、「何者か舎と為_レつくる」(と為_レ為_レ章訓を生かしてゐるほかは、いづれもコレである(但し、倭点は「為_レ舎」)。名訓でも勿論よいが、わざわざ名訓にこだわるほどの例ではない。

No. 95 不_ニ以_レ為_レ患_一 (頂妙寺版初版)、為_レ為_レ章「作」、補注「是」。頂妙寺版は明治版で、不_ニ以_レ為_レ患_一と改訓した。文段経、尋跡抄は「以_レ為_レ」で是訓によつたとしても、これでは少々困る。この例はNo. 7と同類である。No. 7は是訓、本例は作訓である。作訓の方がふさはしいやうにも見えるが、是訓でも一向さしつかへない。No. 7とこの例と文脈がさほど違ふとは思へぬ。この例は、近代訓読では大方作訓を生かしてゐるとみられ、その方が素直である。また、一方、是_レ作の親近性のはつきりした証拠であらう(和訓考(四)16~17頁)。

No. 209 佛_得最_上安_穩無_漏法_我等_及天_人為_レ得_最大利_一 (化城喻品) は、和訓考(一) (21~22頁) にやや詳しく述べた。当訓で推定としてよむことが不可能ではない。「今佛得」に対し「我等…当得」と考へることも出来る。しかし、諸訓読いづれも、得つ、得たりと確定として訓んでゐる。仏が安穩無漏の法を得たことを、我等及天

人が「得最大利」である、と断定する語気は是訓の方が適切である。A類の[18]の場合の為と同様に考へてよからう。足利本でたまたま「まさ」に」とよんでゐるが、このマサニは当訓によるものではなく、「正に……だ」のマサニであらう。

No. 247 為一切導師、及び、No. 518 能持是經者、則為已見我見多宝佛及諸分身者又見我今日教化諸菩薩は、和訓考(四)(17頁)にのべた。No. 247は作訓よりは訓の方が適切であらう。よみ方もコレ、又はタリである。No. 518も是訓が適切で、為字下長文ゆゑ、コレのよみ方が具合がよい。但し、作訓で不可といふのではない。これを生かしたものは倭点の「……ト為」である。織田、訓点校正、非思量本も同様であるが、これらは作訓によつてかうよんだものではない。

No. 437 為從何所來、は為為章定訓、龍本、日相本、科注に定訓がある。立本は当訓。是訓は、補注、文段経、尋跡抄、日相本(重複訓)である。和訓考(三)(7~8頁)で、主として、是訓が補注↓日遠に出て、近代諸訓読に継承される様子をのべた。定訓、当訓も疑問を示す意味でありえぬものではないが、これらは、立本、龍本の方に和訓化されてゐる。

この項に於ても、補注の是訓が大体あたつてゐた。それに対し、為為章訓は、No. 95で作の方がよりよいと思へるが、他は、それでもよいといふ程度、又は不可のものもあつた。

三九(3)e E類(為為章・補注とも他訓、他書に是訓あり)

為為章、補注は是訓以外で、他書に是訓のみられる13例である。内No. 219 523の3例は与・与・作訓がそれぞれ適し、是訓は考へにくい。No. 10にも是訓はふさはしくなからう。是訓が適する例はNo. 341のみ、他は是訓でもよいといふ程度のものである。

No. 10 為 当授記、はすべて定訓、『句解』が「是」とするが、尋跡抄はこれを不可としてゐる(和訓考(三)2~4頁)。

No. 15 皆 為 法師、は、科注に是訓がみえるはかはいづれも作訓、この文脈では、「……ト(三)ナル」がふさはしい。是訓でよんで状態を示すと考へるよりは。

No. 24 是 事 為 三云何、は尋跡抄が句解の是により「為云何」を一訓として紹介してゐるほかは、すべて当訓による。近世近代訓読がベシ訓をとることはすでにのべた(和訓考(一)12~16頁)。当訓によりマサニとよむのも、山田本の如くモシとよむのも、ともに疑問の語気を示すものである。是訓で不可でないとしても、この語気は示せない。

No. 67 為 三諸梵志師、は科注にのみ是とある、架蔵本(延宝12年版十冊本)では、この是を朱で作と直してある。これもNo. 15と同様、「……トナル」がふさはしい。タリでは不十分であらう。

[126] No. 87 何者為舍云 何 為 失 (譬喻品 一一三三)

② 龍本 何者か舎と為(つくる)ニ云何なるをか失と為(つくる)
(46頁)

③ 足利本 なにかこれいまいかなるをかうせんとするといふことを

しらす(二282)

④倭点 何者^{ヲカスル}、為^レ舎^{トイカハ}云^ニ、何^ニ為^レ失^{スル}ト(二133)⑤文段経 何者^ニ為^カ舎^カ云^ニ何^{ナルヲカ}、為^レ失^クト(124頁)

No. 86(為^レ為^レ章・龍本名訓、他は是訓、D類)と一緒に掲示し、まとめてのべる。No. 87は科注に是訓があり、他はすべて名訓である。

No. 86は、龍本ナツク、倭点スルのほかは、文段経以下すべてコレである。これは、為^レ為^レ章訓、龍本漢字訓は名であるが、補注が是とあつたことによらう。一方、No. 87は同じやうな構文でありながら、補注名訓であつたため文段経、尋跡抄、頂妙寺版初版、文久版ではナツクである。明治版で改訓され、近代の訓読は、ナツク、ナスの二つの流れになつてゐる。ナツクは、改訓前の版の影響下にある島地、大藏経、新纂、小林にあらはれてゐる。他はナスである。山川が「云何なるか^{クハレノナ}是^レ失^キやをも知らず」としてゐるのは、その直前の「何者か^{ナレ}為^レ舎^ナなりや」の影響もあらうか。為^レ字が、「是」に改められてしまつてゐるが、わざわざさうしたか、誤りか、改訂版の新潮文庫本でも全く同じである。

頂妙寺版の明治版における改訓は、訓読文自体(あるいは原漢文自体)の解釈に多く依拠して行なはれたやうで、必ずしも伝統にはとらはれぬ様子が、この例からも看取できる。それは、改訓された元の版には、仮名による読みがな、送りがなと返読点などがあるだけで漢字訓が施されてゐなかつたことも、その訓読文自体を虚心に検討することを容易にした一因であらう。この意味で、漢字訓の影響に注意が必

要であるし、また、頂妙寺版の訓点、初版・文久版と明治版とは随分違ふ意味をもつ。

No. 173無^レ智^ハ疑^ハ怪^ハ、則^レ為^レ永^ク失^フト(は作当是の三訓があり、訓法も区である。現在流布の訓読文は「永く失ふべし」で為^レ字をベシとよんでゐるが、これは日遠聖人に淵源する。他にナス、スとよむもの、タメニとよむものがある(和訓考(一)26、27頁)。是訓による訓みは尋跡抄に「則^レ為^レ永^ク失^フト」とあるが、日遠自身これには従つてゐない。確かに「永く失^フベシ」なる訓読そのものは、この文脈でびつたりするが、為^レ字の和訓といふことになると少々問題はあらう。推定をあらはす当訓を採用することは十分考へられるが、この為^レは是訓で訓んでおいてさしつかへないと思はれる。すなはち〔118〕の例と同様に考へうる。

No. 341則^レ為^レ見^ルト(我多宝如来及諸化佛もほぼ同様である。これは、頂妙寺版明治版でコレと改訓されたので近代の訓読は多くコレである(和訓考(一)18、19頁)。これも大部分当訓である。仮定条件句「若説是経」をうけての正文であることを考へれば、No. 173の場合以上に当訓があてはまるが、この場合のベシ訓はNo. 173におけるほど適切ではなかつた(ために改訓されたであらう)。この例も是訓で通じる。ただその和訓化には定式がない(いくつかのパターンがあるが、これによしとするものがない。是にひかれてコレとしたり、為^レ字に比重をかけてス、ナスなどとしたりせるが、時にナリだけでよい場合にも訓読としてはどうもさうはしてゐない。為^レをナリとよむことに何か抵抗があるやうである。タリとはよむのに。No. 173でも、ハ永く失^フナリといふ訓みはつひに出てこない)。

も、特にナツケルといふことに重点をおくか、^レヲ^レトナス（当然、その中にナツクといふ行為も含まうる）と広く考へるかである。従つて、12例いづれも名訓でいけないといふ例はなく、逆に、他訓の付されてゐるものも、それでいけないといふこともないといふ関係にある。

三(10) 名訓為字の和訓

平安朝古点本では、名訓のある限りはいづれもナツクとよんでゐる。中世の足利本では、この場合も一例タリ、一例コレであるのは、例によつて、…トスである。倭点も一例タリで他は…トスである。文段経は一例名訓でありながらナルであるが（No. 74）、これは為とあり、ナツケルカの中略ともみられぬ字詰めである。他は名訓である限りはナツクである。尋跡抄では、文段経でナルであつたものもナツクで、他にも一例ナツクがふえる。No. 86はコレであるが、これは是訓であることによる。この文段経、尋跡抄の訓の様子は、ほぼ頂妙寺版初版に伝はる。但し、No. 74はナスである。明治版になつて、他にもナス、ナルと変更されたものが出てくる。このやうに述べると、かなりいろいろあるやうにも思はれるが、異訓はNo. 74 87 287に集中する。実際にこれらを検討する中で問題点を指摘する。（和訓については、本稿末の表五の名訓為字和訓変遷簡易一覧表をみられたい。）

三(10) 名訓為字例

三(10)(3) a A類（為為章・補注とも名訓）

法華経為字和訓考(田島毓堂)

[127] No. 21 号曰為^{イッテナツケン}淨身^ニ（序品 五a 20）

②立本 号をば曰^シ（ひ）て淨身^{名世}と為^{ケム}ケム（11頁上）

③足利本 なをはいひてしやう身とせん（148）

④倭点 号曰為^{シテケム}淨身^ニ（125）

⑤文段経 号曰為^{シテケム}淨身^ニ（80頁）

龍本はこの部分欠失。近代諸訓読も多くナツクであるが、山川が「号け曰びて淨身となし」と意訳してゐるのはともかくとし、大蔵経、新纂が「なさん」、岩波が「為す」である。又、織田、訓点校正、非思量本は例によつてナス、ナサンである。

この例に限らず、すでに「号して」といふのであるから、ナスでも十分意はつくせるのであるが、名なる漢字訓がある故にナツクと和訓するといふのが実情でもあらう。次の例は、足利本、倭点を除き殆んどすべてナツクとする。

No. 33 是為^{フナツク}諸佛^ハ唯^以一^ノ大事^ノ因縁^ニ故^ニ出現^{シテ}於^ニ世^ニ（方便品 七a 27）。足利本、倭点は「…トス」である。山田本「…と為ふ」である。この例はナツクと訓む必要はさほどない。これがナツクとよまれるのはひとへに名なる漢字訓によるものであらう。ただし、

この少し前に、諸佛世尊は唯一大事の因縁の故に世に出現するのであるが、舍利佛よ、何をもちてさういふのか、と問ふところがある。そこが「舍利佛、云何^{ナルヲカガレル}名^下諸佛世尊^ハ唯^以一^ノ大事^ノ因縁^ニ故^ニ出現^{シテ}於^ニ世^ニ」となつてゐる。この「名」の部分、今の例では「為」となつてゐる。「名」とあればナツクとよみたくなるであら

う。「為」ならばかりに、名の意なりとして「名也」と付訓されても、それをどうしてもナヅクとよまねばならぬといふこともないが、しかし、漢字訓にひかれる度合はきはめて高いやうである。和訓が一種の翻訳とはいへ、漢字とある程度固定的、慣習的關係をもつためである。漢字訓として付されてゐるものも、本文の文字とはほとんど同等に、あるいは時には同等以上に和訓に影響力をもつてゐたと考へられる。

[128] No. 74 何故名曰大宝莊嚴其國中以菩薩為大宝
故(覺輸品 一一b27)

②龍本 大宝と為へきか故(に) (42頁)

③足利本 大ほうとするかゆゑなり (二181)

④倭点 為ニ大宝ニ故 (二60)

⑤文段経 為ニ大宝ニ故 (117頁)

⑥頂妙寺版明治版 為ニ大宝ニ故

漢字訓はいづれも名である。そして和訓ナヅクは、勿論この場合適切であるが、他のよみ方も解釈のちがひとして容認しうるものである。

スベキ、スル、ナス、ナルもいづれも認められる。ただ、ナルは文脈のねぢれが気になるが。近代諸訓読は、頂妙寺版が改訓したため、ナヅクとするのは島地、大蔵経、小林のみである。

No. 87 云何 為ニ失ニは前節[126]にのべた。この例も、頂妙寺版が明治版でナヅクをナスと改訓したため、近代諸訓読中ナヅクとするものは、島地、大蔵経、新纂、小林のみである。

[129] No. 287 我今成^{スレハ}佛道^ヲ受^レ法^ヲ為^ニ法子^ト為^ク (入記品 三〇a26)

②立本法を受ケシメテ法子ト為ク (62頁下)

③龍本法を受(け)て法子と為(つ)く (91頁)

④足利本法をうけてほうしたり (四399)

⑤倭点 受ニ法^ヲ為^ニ法子^ト (四183)

⑥文段経 受^レ法^ヲ為^ニ法子^ト (249頁)

⑦尋跡抄 受^レ法^ヲ為^ニ法子^ト (354頁)

⑧頂妙寺版明治版 受^レ法^ヲ為^ニ法子^ト

漢字訓は、日相本、科注が何によつてか作としてゐるほか、いづれも名である。しかるに和訓はナヅク、タリ、ナルといういろいろである。この文脈では、トナルか、タリの方がむしろ適するやうに思はれる。

文段経はナツテとしてゐるが、尋跡抄ではナヅクに戻つてゐる。日遠もやはり名訓につよくひかれたのであらう。近代の訓読は頂妙寺版の改訓をうけ、ナレリが多い。ナヅクは島地のみである。他で島地と同じであつたものも、ここはちがふ(恐らく大蔵経、新纂は島地と承継關係にあると思ふが、ここではそれを受けつがなかつたのである)。

以上3例は和訓いろいろであつたが、A類の他の例及びB類の1例もともに、平安古点ナヅク、中世ス、近世近代ナヅクで一貫してゐる。ただNo. 507号之^ノ為^ニ常^ト不^ト輕^トはいづれも名訓によりナヅクとよむ(足利本、倭点はトス)が、前節[122]でのべたところでは、同様の他例では作訓をとるのも多く、名訓で一致するのはこの例のみである。又この同類で一部に名訓をもつといふのもNo. 590のみであつた(表二参照)。

No. 507でナヅクとすることは訓読文としては、さほど違和感はない。ただ漢文としてみると、「号」と重言気味である。しかし、原漢文に「号之為：」となるのであつて、「号」を「ナヅケテ」とか「ナヨバ：」とよみ、しかも、「為」をナヅクとよめば、重言といふのであつて、「号」を音読してゐる限り訓読文として為をナヅクとよむこと、いささかも抵触しない。そして、この例で掲示の如くよむことも不自然ではない。No. 22号之為求名は為をナヅクとしてゐない。しかし訓読文では、「号」を立本以下足利本、頂妙寺版でナヅクとよんでゐる。そして、この為字は作訓である。かなり微妙な点があり、必ずしも十分説明できない。作と名の間に峻別さるべきちがひがある筈もないから当然といへば当然であり、文脈に大いに支配されるところがあるといはざるをえない。このNo. 22はさういふことを表はしてをり、又、漢字訓がその漢字の和訓に大きく影響してゐることを示してゐる。

三 10 (3) b B類 (為為章不掲載・補注名訓)

[130] No. 471 当_レ知_ル 已_ニ為_ニ深信解_ト 相_ト (分別品 四五b 24)

② 龍 本 已に深信解の相と為(つ)く (161頁)

③ 足利本 すでに深信解の相とす (207頁上 摩尼園蔵版による)

④ 倭 点 已_ニ為_ニ深信解_ト 相_ト (六212)

⑤ 文段経 已_ニ為_ニ深信解_ト 相_ト (362頁)

この例は、為為章に掲載されてゐないが、他はすべて名訓、和訓は近代諸訓読においてもナヅクである。為為章の脱落と考ふべきであら

法華経為字和訓考(田島鏡堂)

う。

三 10 (3) c C類 (為為章名訓・補注他訓)

[131] No. 86 亦復不_レ知_ル 何_ニ者_ト 是_レ火_ト 何_ニ者_ト 為_レ舍_ト 云_ハ何_ト 為_レ

失_フ (譬喩品 一一c 3)

② 龍 本 何_ニ者_ト 舍_ト 為_レ (つ)くる (云何なるをか失とか為(つ)くる)と (46頁)

③ 足利本 なに物かこれいゝいかなるをかうせんとすると (二282)

④ 倭 点 何_ニ者_ト 為_レ 舍_ト 云_ハ 何_ニ者_ト 為_レ 失_ト (二138)

⑤ 文段経 何_ニ者_ト 為_レ 舍_ト 云_ハ 何_ニ者_ト 為_レ 失_ト (124頁)

右掲例中、前の為字がNo. 86である。すでに前節でものべた(126)。為為章、龍本のみ名訓、補注是訓、他は補注に従つてゐる。和訓もその漢字訓のままである。コレなる和訓は名訓為字をさうよんだのではなく、是訓をさうよんだのである。なほ、龍本は為為章、補注不一致の例は為為章に一致することが多い。

この例も、是でも名でもかまはぬが、No. 87と別にしなければならぬとも思へない。

三 10 (3) d D類 (為為章他訓・補注名訓)

[132] No. 470 当_レ知_ル 是_レ為_ニ深信解_ト 相_ト (分別品 四五b 22)

② 龍 本 是(れ)を深信解の相と為(つ)く (161頁)

③ 足利本 これを深信解の相とす (207頁上 摩尼園蔵版による)

- ④倭点 是^ヲ為^ス深相解^ノ相^ト(六二四)
- ⑤文段経 是^ヲ為^ス深信解^ノ相^ト(三〇二頁)

一見して、〔130〕№471と同類と知られる。為^レ為^レ章のみが是訓である。為^レ為^レ章は№471不掲載、又№475も不掲載と、このあたり、何らかの混乱も感じられる。それはともかくとして、この訓読文は、右掲の限りでは「コレヲ…トナヅク」としてゐる。為^レをナヅクとよむ例ではないともさうであるが、原漢文からはよみにくい。それで岩波は「是れは、深信解の相なることを」としてゐる。為^レ字の上の「是」を和語代名詞によむのはよいが、コレヲとなるのは、為^レをナヅクとするからである。もともとコレハ…デアルの構文であるが、このデアルが為^レに相当する。これをナヅクと他動詞とよむためにコレハでなく、コレヲとせざるをえなくなるのである。この例など、わざわざ名訓にせずとも、是訓でもよいものである。

三〇(3)e E類(為^レ為^レ章・補注とも他訓、他書に名訓あるもの)

〔133〕№590 皆号^レ之^ヲ為^ス施無畏者^ト(普門品 五七b23)
この例は、和訓考(16頁)にのべた。ナヅクとよむのは、立本のみである。「号^レ之」^{〔127〕}とあるから、為^レをナヅクとよむのは重言気味であるが、これは№21でも同様であるから、このことから名訓不適とはいへない。しかし作訓で十分で、…トナスが適訓と思へる。
是訓為^レ字の〔122〕№610で「名^レ為^レ…」とある例についてのべた。そこでは是訓より作訓を可とした。ここでもそれがあてはまる。が、名訓と

した意を忖度すれば、この為^レは…トイフ名デアル(ナヅク)の意味だといふことで、これを必ずナヅクと和訓化しなければならぬことはな
いと考へる。

三〇(4) まとめ

為^レ字をナヅクとよむことも、一種の特殊訓といふべきであらうが、ウとかサダメテよりはよほどわかりやすい。それだけ特殊性がうすいのであらうが、これも、まぎれもなく名なる漢字訓から生れてゐる。そして、作、又ある時は是とのちがひは微妙であつた。ほぼ同様と思はれるものも別の漢字訓がついてゐたりした。名訓為^レ字は結局のところ、平声為^レ字の中心的意味たる作(…トナス…トス)是(コレ…ナリ、タリ)を文脈によつて「…トナヅク」と色付けしたものだと思へておけばよからう。
'83・10・27(つづく)

表四 是訓為^レ字和訓変遷簡易一覧
A類(為^レ為^レ章・補注とも是訓)

No.	立	龍	足	倭	文	尋	頂初	頂明	近代訓読
64	／	タメニス	ナス	○	○	○	○	○	○
62	○	タリ	タリ	○	○	○	○	○	○
61	○	ナル	ナル	○	○	○	○	○	○
29	○	タリ	タリ	○	○	○	○	○	○
19	○	タリ	タリ	○	○	○	○	○	○
7	○	ス	ス	○	○	○	○	ス	ス

法華經為字和訓考(田島毓堂)

222	218	217	214	213	177	176	172	163	149	148	146	123	121	118	106	96	92	91	90	No.
○	○	○	○	○	○	○	○	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	立
／	／	／	／	／	／	／	／	タメニ	○	○	○	○	○	○	○	／	／	／	／	龍
ス	ス	ス	ス	ス	○	○	ス	○	ス	○	○	ス	タリ	ス	マシ	タリ	タリ	タリ	ナル	足
ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	タメニ	ス	トシテ	ス	タリ	タリ	タリ	ス	ス	倭
○	○	○	○	○	○	○	○	ス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	文
○	○	○	○	○	○	／	○	ス	○	○	○	○	○	○	／	○	○	○	○	尋
○	○	○	○	○	○	○	○	ス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	頂初
ス	ス	ス	ス	ス	○	○	○	ス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	頂明
ス	ス	ス	ス	ス	○	○	○	ナス	○	○	タメニ	○	○	○	○	○	○	○	○	近 訓読代

352	351	350	349	348	347	345	344	343	342	339	294	278	277	274	271	232	226	225	223	No.
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	／	○	○	○	○	○	○	○	○	立
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	／	／	／	／	龍
ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ナル	ス	タメニ	ス	ス	○	○	ス	ス	ス	足
ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ナル	ス	タメニ	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	倭
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	文
／	○	／	○	／	○	○	○	○	○	○	／	○	○	○	／	○	○	○	○	尋
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	頂初
ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ナス	○	○	○	○	○	○	○	○	ス	ス	ス	頂明
ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ナス	○	○	○	○	○	○	○	○	ス	ス	ス	近 訓読代

472	469	463	442	436	427	424	421	420	419	413	392	386	382	360	359	358	357	355	353	No.
／	／	／	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	立
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	龍
ナル	○	トシテ	○	○	○	トシテ	○	○	トシテ	○	○	マサニ	○	○	○	○	○	○	○	足
ス	ス	トシテ	ス	タリ	ス	トシテ	ス	ス	トシテ	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	倭
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	文
○	○	○	○	／	○	○	○	／	○	○	○	○	○	／	○	○	○	／	○	尋
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	／	○	○	○	○	頂初
○	○	○	○	○	○	○	○	○	タリ	○	○	○	○	ス	ス	ス	ス	ス	ス	頂明
○	○	○	○	○	○	○	○	○	タリ	○	○	○	○	ス	ス	ス	ス	ス	ス	近 訓 読

540	539	538	537	536	535	534	533	532	531	530	529	528	521	487	482	481	477	476	474	No.
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	／	／	／	／	／	／	立
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	龍
タリ	タリ	タリ	タリ	タリ	タリ	タリ	ス	タリ	タリ	タリ	ス	ス	○	○	ナル	○	○	ナル	ナル	足
ス	ス	ス	○	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ナル	ナル	ナル	ナル	ナル	倭
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	コレ	○	○	○	○	文
○	○	○	○	○	／	○	／	○	／	○	／	○	○	○	／	○	／	／	／	尋
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	頂初
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	ス	○	○	○	○	○	頂明
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	ス	○	○	○	○	○	近 訓 読

法華經為字和訓考(田島毓堂)

470	273	269	151	115	66	65	49	No.	C類 (為為章是訓・補注他訓)
ノ	ナス	ナス	ノ	ノ	ノ	ノ	メ	立	龍足倭文尋頂初頂明訓近代
ク	ナス	ナス(異文)	ニ	ノ	ノ	ノ	メ	龍	
ス	ス	ス	タ	ノ	ノ	ノ	メ	足	
ス	ス	ス	メ	ノ	ノ	ノ	メ	倭	
ク	ナス	ナス	タ	メ	メ	メ	メ	文	
ク	ノ	ノ	メ	メ	メ	メ	メ	尋	
ク	ナス	ナス	メ	メ	メ	メ	メ	頂初	
ク	ナス	ナス	メ	メ	メ	メ	メ	頂明	
ク	ナス	ナス	メ	メ	メ	メ	メ	訓近代	
ク	ナス	ナス	メ	メ	メ	メ	メ	訓近代	

475	No.	B類 (為為章不掲載・補注是訓)	600	598	596	595	546	541	No.
ノ	立	龍足倭文尋頂初頂明訓近代	ノ	ノ	ノ	ノ	○	○	立
○	龍		○	○	○	○	○	○	龍
ナル	足		ナル	ナル	ナル	ス	タ	マ	足
ナル	倭		ナル	ナル	ナル	ス	タ	シ	倭
○	文		○	○	○	○	○	○	文
ノ	尋		ノ	ノ	○	○	ノ	ノ	尋
○	頂初		○	○	○	○	○	○	頂初
○	頂明		○	○	○	ス	○	○	頂明
○	訓近代		○	○	○	ス	○	○	訓近代
○	訓近代		○	○	○	ス	○	○	訓近代

173	87	67	24	15	10	No.	E類 (為為章・補注とも他訓、他書に是訓あるもの)
ニ	ノ	ノ	ニ	ナル	メ	立	龍足倭文尋頂初頂明訓近代
マ	ク	タ	マ	ナル	メ	龍	
サ	ナ	タ	マ	タ	メ	足	
ノ	ス	タ	サ	タ	メ	倭	
ノ	ス	タ	ス	タ	メ	文	
ヘ	ク	ナ	ヘ	ナル	メ	尋	
シ	ナ	ル	シ	ナル	メ	頂初	
ヘ	ク	ナ	ヘ	ノ	メ	頂明	
シ	ク	ナ	ヘ	ナル	メ	訓近代	
ヘ	ナ	ル	ヘ	ナル	メ	訓近代	

518	497	247	209	95	86	46	No.	D類 (為為章他訓・補注是訓)
ノ	ニ	○	○	ノ	ノ	○	立	龍足倭文尋頂初頂明訓近代
○	マ	ノ	ノ	ノ	ノ	○	龍	
○	サ	タ	マ	ス	○	○	足	
○	メ	タ	サ	ス	○	○	倭	
○	タ	タ	ニ	ス	○	○	文	
○	メ	タ	ス	ス	○	○	尋	
○	タ	タ	ス	ス	○	○	頂初	
○	メ	タ	ス	ス	○	○	頂明	
○	タ	タ	ス	ス	○	○	訓近代	
○	メ	タ	ス	ス	○	○	訓近代	

610	602	No.
ス	ノ	立
ス	ニ	龍
ス	マ	足
ス	サ	倭
ス	メ	文
ノ	メ	尋
ス	タ	頂初
ス	メ	頂明
ス	メ	訓近代

523	519	341	275	267	255	219	No.
ナス	ニタメ	マサ	ス	ス	ウ	ニタメ	立
ナス	ニタメ	ニマサ	ス	ス	ウ	／	龍
ナス	ニタメ	ナル	ス	ス	ス	ニタメ	足
ナス	ニタメ	ナル	ス	ス	タリ	ニタメ	倭
ナス	ニタメ	ヘシ	ナス	ナス	ウ	ニタメ	文
／	／	ヘシ	／	ナス	ウ	／	尋
ナス	ニタメ	ヘシ	ナス	ナス	ウ	ニタメ	頂初
ナス	ニタメ	コレ	ナス	ナス	タリ	ニタメ	頂明
ナス	ニタメ	コレ	ナス	ナス	タリ	ニタメ	近代 訓読

A)Eは表一に準ずる。

○はコレ、他の和訓は簡単に記した。

／は本文のないことを示す。

表五 名訓為字和訓変遷簡易一覽

507	301	300	287	87	74	33	21	No.
／	／	／	○	／	／	○	○	立
○	○	○	○	○	ス	○	／	龍
ス	ス	ス	タリ	ス	ス	ス	ス	足
ス	ス	ス	タリ	ス	ス	ス	ス	倭
○	○	○	ナル	○	ナル	○	○	文
○	○	○	○	○	○	○	○	尋
○	○	○	○	○	ナス	○	○	頂初
○	○	○	ナル	ナス	ナス	○	○	頂明
○	○	○	ナル	ナス	ナス	○	○	近代 訓読

E	D	C	B
590	470	86	471
／	／	／	／
○	○	○	○
ス	ス	コレ	ス
ス	ス	コレ	ス
(ナス)	○	コレ	○
／	○	コレ	○
(ナス)	○	コレ	○
(ナス)	○	コレ	○
ス	○	コレ	○

A)Eは表三に準ずる

○印はナツク、他は簡単に記す

／は本文のないことを示す

注1 為字の漢字訓は、加點者本人が工夫して、注釈や和訓を示すために付したといふより、先行書(為為章の如きもの)があつて、それを適宜付していつたと考へられる。それを付すことによつて、その場での和訓をも示すことになつたものである。しかし、先行書の示すところが、その場でふきはしくないと判断されれば、それは無視されたり、改変されたりすることも当然ありうるであらう。

注2 拙稿「法華経為字訓序説」(『名古屋大学文学部三十周年記念論集』昭54

・3) 19頁表七参照されたし。

注3 :トシテは、No.121我^ニ為^ニ法^王、於^ニ法^王、自^在のやうに状態をあらはすもの、つまり、タリの連用形ト+接続助詞シテだから、ス(サ変動詞)とは、別扱ひすべきで、むしろ、タリ(断定)に含めるべきかもしれないが、訓点のつけ方は、右の例にもみる如く、為字に対して、は「シテ」であり、これをスと同様に考へてゐたふしもあり、語源に遡つて考へれば、それでもいけないこともないので、スの中に含めておいた。いづれにしても、このスは、何かをスル意の他動詞でなく、:テアルの意の自動詞である。

注4 非思量道人佐藤隆豊氏訳『和訳大乘法華経』明治38年1月刊、非思量窟

出版部

- 注5 伊藤清徹氏『和訳法蓮華経』大正5年9月刊 良書刊行会
- 注6 他にマシマスは足利本No.27240、倭点No.272、イマスは足利本No.78、いづれも為為章、補注とも「作」訓である。
- 注7 拙稿「和訓考(二)」15頁。
- 注8 拙稿「法華経為字ベシ訓源流考」(『名古屋大学国語国文学』50号、昭57・7)参照。